

東京芸術劇場シアターオペラvol.10

全国共同制作プロジェクト

プッチーニ／歌劇『蝶々夫人』

《新演出》全幕 日本語字幕付原語上演

笈田ヨシ演出『蝶々夫人』は現代人の共感をよぶ

約半世紀にわたり俳優として、また演出家として

ヨーロッパを中心に多彩な観客を魅了してきた笈田ヨシ。

オペラ演出でも国際的に注目され、

満を持して『蝶々夫人』に挑む笈田に話を聞いた。

長年パリに暮らす笈田ヨシは、83歳を超えてなお舞台や映像の仕事で忙しい。正しい姿勢で足早に歩き、朗らかに笑う。初めての渡仏はピーター・ブルック演出のシェイクスピア作『テンペスト』(1968)に出演するためだった。創造性に富む演技は、百日に及ぶアットール作『鳥の会議』アフリカ巡業(1972～73)、インド古代叙事詩に基づく上演時間9時間の『マハーバーラタ』^{#1}(1985)などの画期的なブルック作品を支え、『ピーター・ブルック回想録』^{#2}でもその才能は讃えられた。

70年代になると演出家としても活躍、ベルリンの劇場に委嘱された三島由紀夫作『サド侯爵夫人』(1995)などで注目を集める。1998年にプリテン作曲『カーリュー・リヴァー』を南仏のエクサン・プロヴァンス音楽祭で演出した後は、次々とオペラを手掛けてきた。

だが、笈田は「オペラの素養は全くない」と語る。

「譜面は読めないし、特別な音楽教育も受けていません。ただ、僕の演出したオペラを見た人たちに“音楽的な舞台”と言われました。若いときに習った義太夫や能楽の感覚が生きているのかもしれませんが。それに、子供のときから好きだった歌舞伎は、音楽と舞踊と芝居がそろうところが、オペラに似ていますね」

2000年代にはマーラーの『大地の歌』やシューベルトの歌曲集『冬の旅』を、新鮮な音楽劇に構成。

「演出依頼は、『椿姫』や『トスカ』のようにいわゆる正統と呼ばれるオペラはあまりなく、創作ものが多いんです(笑)。今年ようやく『蝶々夫人』をスウェーデンのオペラハウスで演出しました」

2016年2月にスウェーデンのヨーテボリ歌劇場で初演を迎えたプッチーニ作曲『蝶々夫人』は、現地メディアでも高く評価された。

アメリカ人とその文化を敬う蝶々夫人の姿は、僕自身の経験に重なる

「観客の目を喜ばせながら、蝶々夫人とピンカートンの人格、および二人の関係を引き出す舞台」という記事が嬉しかった。『蝶々夫人』は奥深いドラマで、アメリカの文化と自分の考えの間で人間がどう生きるか、と問いかけます。知らない文化をどこまで信じて、どこまで従うか、と蝶々は悩みました」

彼女の迷いは、12歳で終戦を迎えアメリカ主導の教育を受けた笈田が抱く複雑な感情につながる。

「アメリカは日本より素晴らしい、と思い込み、慣れ親しんだ宗教も家族も捨てた女性——それが僕の考える蝶々さん。アメリカ人とその文化を敬う姿



笈田ヨシ

は、僕自身の少年時代の経験に重なる。戦時中は日本のものが一番と教えた大人が、戦後はアメリカ文化を手本に掲げそれまでの日本文化を否定した。アメリカ人と付き合って良い服や食べ物を手に入れる街の娼婦に反発しながら嫉妬して、しだいに僕もアメリカに憧れました」

2017年の日本公演では、好評を博した先般のスウェーデン版から指揮者、歌手、オーケストラが変わるほか、笈田は演出を変え、美術・照明・衣装も改める。さらに翌年ニューヨークで演出予定の『蝶々夫人』は、プッチーニの曲に想を得て現代作曲家デヴィッド・ラングが新たに作る曲で、新演出に挑む。各々異なる3ヴァージョンの演出に取り組む理由を尋ねた。

「人は相手の出身地や年代に応じて、話し方を調節するでしょう。同じように、上演場所の環境に沿って、お客さんに僕の思いを伝わりやすくしたい。僕の目的は音楽、歌、身体の動きなどを通じて、人間の哀しさや不思議さを表現すること。“人間って面白いね、蝶々さんと私には共通点があるかな?”、そんな気持ちをお客さんにもって帰ってほしい」

幕が下りた後も観客の心を揺らす演出は、スウェーデン版の終盤で際立つ。ピンカートンの裏切りを知った蝶々夫人の行動は、さまざまに受け取れるのだ。果たして日本版はどうか、期待が高まる。もうひとつの楽しみは、笈田演出のシンプルな空間に流れる美。

「その美しさは、僕の手腕で成立させるものではありません……。いい舞台が生まれるのは音楽家、装置家、衣裳家、照明家たちが100パーセントの能力を発揮して、それらが化学反応を起こす時です。僕の役目は、作品に関わるアーティストたち全員が、自分の才能をじゅうぶん出せるように助けることです」

取材・文：桂 真菜(舞踊・演劇評論家)

※1)10年がかりで仕上げたジャン=クロード・カリエール、ブルック共同翻案『マハーバーラタ』の初演はアヴィニョン演劇祭の石切り場。来日公演(1988、銀座セゾン劇場)も果たした。ブルック監督の問題の映画(1989)にも笈田は出演し、台本を翻訳して刊行(1987、木下長宏と共訳、白水社)。
※2)『ピーター・ブルック回想録』(ピーター・ブルック著、河合祥一郎訳、白水社)

プッチーニ／歌劇『蝶々夫人』あらすじ

19世紀末の長崎を舞台にした、プッチーニの代表的イタリア歌劇の一つ。アリア『ある晴れた日に』はつとに有名。アメリカ海軍士官のピンカートンは、異国の地、長崎で、元士族の娘である15歳の少女・蝶々さん(蝶々夫人)と結婚する。蝶々さんはピンカートンが去ってから彼の言葉を信じて帰りを待ち続けるが、3年後、長崎に戻った彼にはアメリカ人の妻がいることを知る。ピンカートンとの間に生まれた子供を彼とアメリカ人妻に託し、自らはある決断をする。



2月18日出演

小川里美

SATOMI OGAWA

各幕で変化していく蝶々さんに、どう感情移入するか。プッチーニが見た蝶々さん像も探したい。

東京芸術劇場のシアターオペラでは、『イリス』『こうもり』『メリー・ウィドウ』、そして『カルメン』のミカエラと、出演を重ねてきた小川里美さん。2005年にメゾからソプラノへと転向した経歴を持ち、高音ばかりでなく、中低音も充実。華やかな容姿と相まって蝶々さん役に大きな期待が寄せられている。『蝶々夫人』は、これまで、抜粋では演じた経験があるが、全曲を通しての舞台は初めてとなる。

役柄について——「蝶々さん役が一番の問題は、全幕を通してほとんど出ずっぱりなこと。1幕は若くハッピーで幸せを実感。2幕はピンカートンが帰ると信じて待つ。観ている方は哀しいのに、本人はそれを感じてはいけなく、その複雑な明るさをどう表現するか。2幕後半は絶望をどこまで感じて歌えるか。ケイトが去って泣き崩れる場面も、どこまで感情移入するかがむずかしいですね」

声について——「登場シーンは音域が高く、最後の幕ではドラマチックさが求められる。1幕から2幕前半はしゃべるように歌う部分が多く、むずかしい役ですね」

蝶々さん像について——「抜粋で演じたとき、日本女性としての蝶々さん像が見えたように思いました。また先日スペインで『蝶々夫人』を観たとき、蝶々さんはとても純粋だけど、やはり芸者だったのだ、と感じた瞬間があり、蝶々さん像をもう一度考え直すきっかけになりました。日本のお客様が感じる日本らしさは出せても、プッチーニが感じたのはどんな蝶々さん像なのか。日本を題材にしたイタリア・オペラなので、いろんな要素が重なりますね」

演出家・共演者について——『『蝶々夫人』には、日本が世界に誇れる、栗山昌良先生、浅利慶太先生の完成された美しい舞台があります。今回の笈田さんの演出は、これまで観たことがない、非常に新しいものになるのでは、と期待しています。指揮者のバルケさんとは、以前一緒にしました。とても知的で明るい方なので、歌手の方とのコミュニケーションもお得意です。また以前何度も共演して、信頼し尊敬する先輩たちと一緒にできるのが、とても楽しみです」

2月18日(土)・19日(日) 14:00開演 コンサートホール

詳細はHPへ

指揮：ミハエル・バルケ 演出：笈田ヨシ

出演：蝶々夫人：小川里美(18日)・中嶋彰子(19日) / スズキ：鳥木弥生 / ケイト・ピンカートン：サラ・マクドナルド / ピンカートン：ロレンツォ・デカーロ / シャープレス：ピーター・サヴィッツ / ゴロー：晴 雅彦 / ヤマドリ：牧川修一 / ポンゾ：清水那由太 / 役人：猿谷友規 / いとこ：熊田祥子 ほか
管弦楽：読売日本交響楽団 合唱：東京音楽大学

【他会場公演】金沢：金沢歌劇座 / 大阪：フェスティバルホール / 高崎：群馬音楽センター



2月19日出演

中嶋彰子

AKIKO NAKAJIMA

日本では初となる蝶々さん役、歌うだけでなく演じることが重要。まさに体力勝負です。

15歳で海外に渡り、その後ヨーロッパの歌劇場で活躍を続けてきた中嶋彰子さん。近年は日本の良さ、日本文化のすばらしさを再認識しているという。『蝶々夫人』は10年以上もあためて来た役で、研究も重ねている。満を持して、日本で初めて取り組む蝶々さん役。新しい独自の蝶々さん像が期待できる。

役柄について——「蝶々さんは海外で一度、ウィーン郊外のシュタイヤー音楽祭で歌いました。これまで日本では、新国立劇場でのモーツァルトなど数作に出演しましたが、プリマドンナが主役のオペラは歌っていない。この公演はまさにチャレンジです」

声について——「蝶々さんを歌うソプラノは、強い声の人が多いのですが、プッチーニが意図したのは、はたしてそうなのでしょうか。これまで声の面で、自分には歌えないと思っていましたが、やっと最近になってできるのではないかと、考えるようになりました。この役のむずかしさは、極端な高音と低音が必要で、とくに低音を効かせないといけない。いま低音のトレーニングに励んでいます」

蝶々さん像について——「これまで海外での生活が多かったので、着物のさばき方とか所作の面でむずかしいと思っていました。最近お能や歌舞伎の先生の指導を受け、何とかできるかなと思っています。蝶々さんは2幕が大事で、知的な面をしっかり演じて、役柄に深みを与えたい。また歌うことと共に演じることが重要な役です。一晩で蝶々さんの一生をきちんと伝えられるかが鍵となると思います。とある東洋の女性が、あの時代のなかで、最後まで愛に生きるという役です。心が純粋で、信じることを通す女性。まさに究極の役なので、命がけてやらないといけません。歌うだけでなく舞台上演するのは体力勝負。いま、毎日走って体を鍛えています」

演出家・共演者について——「笈田さんは国際的な日本人で、オペラのなかの日本人を理解した人です。しかも役者の立場で分析して演出ができる方。指揮者も共演者も今回が初めてですが、オペラはチームワーク。みんなで一緒に創り上げていくのを、楽しみにしています」

取材・文：石戸谷結子(音楽評論家)



主催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) 事業提携：読売日本交響楽団
共同制作：公益財団法人金沢芸術創造財団 / 公益財団法人石川県音楽文化振興事業団 /
関西テレビ放送 / フェスティバルホール(朝日ビルディング) / 公益財団法人高崎財団